

備工場、鉄道従事者の養成機関の建設をも含む徹底したものであった。

一方、今なお、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの各地で、かつての西洋人顧問の奮闘と挫折そして中国の呻吟とが繰り返し展開されている。その意味から言っても、本書は将来にわたって深い示唆に富んだ一書と言えよう。

(講談社 刊)

Owen Chadwick :
*The Secularization of
 the European Mind in
 the Nineteenth Century*

吉 田 映 子

歴史研究において、ある時代とその精神を統括的に表現するような用語がある。例えば〈ルネッサンス〉とか〈啓蒙〉などの用語は、それらが事実何であったかはかならずしも明確にされぬまま、既に了解済みのように使われる。こういった用語を、著者は umbrella-term (or word) と呼び、その限界とともに効用をも認めている。「19 世紀ヨーロッパ精神の世俗化」と題するこの書物で、著者は〈Secularization〉を、一つの umbrella-term として提示しようと試みている。

〈世俗化〉というのが、狭義には政治制度や教育制度を宗教の支配から、切り離すこと、さらに知識、道徳、芸術などの、宗教的起源、宗教的文脈からの独立を意味していること、それはまた、かならずしも 19 世紀のみに特有なことではなく、西欧近代社会が一貫して追求してきたものであることまでは、常識的

に理解できるとしても、その具体的内容となると、問題は容易ではない。それが否応なしにかかわっている宗教そのものが、とうてい一筋縄ではいかない性質のものである以上、この困難はむしろ当然といえるかもしれない。

問題を広く〈聖〉対〈俗〉ということできらえるならば、それはあらゆる時代、あらゆる社会に、なんらかの形で存在してきたといえる。〈聖〉〈俗〉の定義如何にもよるが、いずれにせよ、完全に〈聖〉なる社会も、完全に〈俗〉なる社会も、かつて存在しなかったからである。他面、それはけっして単純な対立関係ではなく、相互に深く滲透しあうものでさえある。宗教改革が〈聖〉から〈俗〉を切り離すのではなく、〈俗〉を〈聖〉別するものであったことは、あらためて述べるまでもないだろう。18 世紀の啓蒙は、明らかに〈世俗化〉を強力に推進したのだったが、カッシーラーも指摘しているように、啓蒙の宗教に対する表面的な敵対性に目を奪われて、その時代の精神的諸問題がつねに宗教問題から強い刺激を与えられていた事実を見失ってはならないはずである。その意味で、著者が〈世俗化〉を、かつて敵味方がそれぞれのサイドから、エモーショナルにぶつけあった言葉としてではなく、近代ヨーロッパの文明と社会が、宗教（具体的にはキリスト教）的要素との間にもってきた関係をあらわす中立的な用語として用いようとする意図は、一応首肯できる。

しかしながら、19 世紀を特徴づけるものとして、例えば〈ルネッサンス〉でも〈啓蒙〉でもなく、なぜ〈世俗化〉なのか、また一方、すでに 19 世紀をある程度概括できそうな〈機械と産業〉とか〈科学〉〈実証主義〉などではなく、なぜ〈世俗化〉なのか、この点について、著者の論じるところを検討してみなければならない。

著者が焦点を当てているのは、19 世紀の

特に後半である。〈世俗化〉が前世紀の〈啓蒙〉をなんらかの意味で継承しているという前提にたつとき、例えばフランス革命以後 19 世紀前半までのイギリスは、あまりにも〈啓蒙〉に対して偏った判断をしていた。「ヴォルテールもルソーもいずれ劣らぬ悪人だ」と断言したジョンソン博士などは論外であるにしても、一般に理性と啓蒙の時代は行きづまり、ギロチンの恐怖のなかで死滅したものと見なされていたのである。啓蒙をあらわす Enlightenment という言葉自体、当初はドイツ語の Aufklärung を借用するなど、イギリス人にはなじまないもので、OED によると初出するのは 1865 年、それも悪い意味で使われている。ところが 19 世紀の 60 年代あたりを境に、啓蒙の再評価の機運が生じ、とりわけ 1870 年代の John Morley の仕事は、1789 年以来イギリスの intellectual map から消えていたフランスの啓蒙を正しくよみがえらせる役割を果たした。

「人間性は善である。これが世界を secularize する鍵であり、宗教、政治、思想など多くの領域において、形式主義、絶対主義、蒙昧主義と闘う原理である」と Morley は書いた(1878)。これはまさに啓蒙の提起した問題である。しかしながら、時代はすでに 19 世紀の半ばを過ぎ、18 世紀とは全く異なる要因がヨーロッパ社会にあらわれてきていた。端的に表現するならば、それはすでにマルクスとダーウィンを知っている社会であったということだ。ヴォルテールが〈啓蒙〉の象徴であったように、ダーウィンの名も、象徴として〈世俗化〉の推進力となった。マルクスもまた、著者によれば、〈世俗化〉のもっとも強力な哲学をうちたてた。

いかにしてヴォルテールの時代の〈啓蒙〉の問題が、マルクスとダーウィンの時代に〈世俗化〉の問題となったか。これはたしかに興味深い問題である。その考察にあたって、

著者は全体を social problem, intellectual problem の二部に分け、前半で自由主義、マルクス、労働者階級の動向、反教権主義を、後半で、19 世紀におけるヴォルテール、科学と宗教、歴史と世俗、人間の道徳性、摂理観といったものを扱っているが、この構成はいささか荒っぽいのではないかという疑問を感じた。知識や思想と、それを受けとる(ないしはそれを生み出す)社会の条件との関係は、思想史がつねに直面する微妙な問題である。その意識が著者に欠けているわけではけっしてないのだが、ここに見る限りでは、個々の章の間に十分な連関性、整合性が生み出されておらず、結果的には 2 部に分けた意味は失われてしまっている。また、事実を重視して、なぜそれが起きたか問うことを、かなり意図的に棚上げしていることも、かえって統一的な理解を困難にしているように思える。

たしかに 19 世紀は、「機械」ひとつを考えてみても、「事実起ったこと」が、目に見える圧倒的な力をもって社会に君臨した時代かもしれない。個々の事象を判断し、相互に関連づける暇もなく、政治的、経済的、社会的、文化的な変動が引き続いた。19 世紀ヨーロッパの精神は、そうした状況のなかでどのように動いていったか。大規模な工業化、都市化による人口の大移動、自然科学をはじめ多くの分野で大量に獲得された新知識、出版物によるその普及、多くの組織や党派が生まれ広汎な活動をくりひろげるなど、社会は一挙に巨大化し、複雑化し、人間の生活に破壊的といつてよい影響力をもつにいたる。理性や自由など前代から引きついだ価値もその性質を変え、かつての visible few から、invisible many によって担われ、根拠づけられるものとなった。それらが、文化的道具としてむしろ集団のなかに位置づけられるのは、もう少し後になるとしても、匿名の大衆の動向は無視できないものとなった。

そして大衆は、一般に宗教に対して無関心ではなかった。一般の労働者大衆は、意識せざるキリスト教徒と意識せざる世俗主義者の間にいた、というのが著者の見解である。彼らは宗教的權威の押しつけ、とりわけ教会が自由の抑圧者としてあらわれたときには激しく反撥したが、一方明らさな無神論も好まなかった。宗教の批判者、社会の改革者たちは、大衆から無神論者と見なされまいと配慮し、そうした事情が偶然的にいわゆる *secularist* を生んだともいえる。彼らは明確に〈モラル〉を求めていた。既成の宗教に依存せず、より幅広い人間的モラルを確立しようとする努力が、19世紀の思想には特徴的であり、教会批判にしても、かつての迷信の闇対知識の光という図式ではなしに、正義と自由の名において、不自然な倫理を告発するという形に変わった。その一方で、〈科学〉という新しい価値が、すべてに通用する〈真理〉そのものとして信仰の対象になったのも事実であった。科学は結局その崇拜に應えてくれず、A. フランスの言うように、「知恵の実は口の中で灰に変わる」ことになるのだが――。

その意味では、Draper, Vogt, Moleschott, Büchner, Haeckel, Huxley など、ダーウィン説の普及宣伝につとめた人々に焦点を当てた第7章「科学と宗教」の論述には興味深いものがあつた。一般の人々にとっての関心事

は、科学それ自体ではなく宗教であつた。それゆえ彼らはかなり強引な形で科学を宗教とかがかわらせ、科学者としてよりもむしろ神学者として語ることによって、聴衆をひきつけた。〈科学的道徳〉などというものが、なぜそれほど喧伝されたかは、現代の目には不可解に思えるが、この大衆の奇妙に健全な道徳感覚が、19世紀の〈世俗化〉の本質を語っている。

こうしたことを明らかにしながら、著者の問題意識は、〈世俗化〉を宗教との訣別、完全な追放とは違う方向でとらえ、少なくとも、宗教的なものとの間の精神的緊張を失わない形で押えておこうという点にあるように思われる。

もとより、問題はそこで解決するわけではなく、個々の思想家についても、ヨーロッパ各国の社会的状況についても、なお詳細に発展されるべき点は多々残されている。問題圏の大きさからして、著者は当然悪戦苦闘を強いられたはずなのだが、あまり肩ひじを張らずのんびりと語っている。序論的エッセイとして、巧みな比喩や例証、語り口を楽しみながら読んだことを付け加えておきたい。

Owen Chadwick: *The Secularization of the European Mind in the Nineteenth Century*, Cambridge University Press, 1975.